

畦っこ瓦版 NO133

畦っこ元気くらぶ
平成29年5月31日
編集 高野重春

連絡先

Takano48@mue.biglobe.ne.jp

人と自然が共存できる里山回復を目指した活動

初夏の装い

新緑が始まる頃、地表に届く陽射しはキンランやギンランの発芽を促し、ヤマツツジの朱色や紅紫色の花をより鮮やかに引き立てて楽しませてくれます。

新緑から1ヶ月が過ぎると木々は葉を広げ、深緑に変わり、地表に届く木漏れ日率は下がり、林内は陽射の当たる度合いで明暗がはっきりします。

5月から6月に移る時期、日影や木陰にコアジサイやサイハイランが開花します。サイハイランは1本の花茎に数十個の花をつけ、地味に見える花も株がまとまって咲いていると見応えがあり、花を一つ一つ観察すると品格がある美しい花です。

サイハイランが開花している場所は、顔の周りを飛び回る小さな昆虫のカやブヨの攻撃に悩まされ、ゆっくり花を眺め写真を撮るのも憊ならない。

林内ではキビタキの美しい囀り、ホトトギスやウグイスの鳴き声が聞こえ、時々オオタカが近くで警戒する時に発する鳴き声が聞こえ、木々の枝からこちらを警戒しているように見える。



ヤマツツジが満開5月10日



緑一色の林内5月30日

里山の変化

4月中旬に4日連続の夏日、5月に入っても高温は衰える気配がなく、全国でも夏日は突出しました。田起こしや代掻きは田植えの前の重要な作業です。その作業に水が確保できなければ田植えはできません。今年は田植え前に水不足の状態が起こり、田んぼが干上がり、ヤマアカガエルの幼生が死滅、水のない田んぼは餌場になりました。



干上がった田んぼ

生き物とつながる田んぼの環境は年々悪化しています。小さな谷戸で起こっている環境変化は徐々に規模を拡大しています。

活動拠点では4年前にハラビロトンボの生息が確認できなくなりました。原因は生息地の湿地が改変して乾燥してしまったことが影響しています。

モリアオガエルも素掘りの池に水が溜まらなくなり、産卵が全く行われません。

昨年は自然の豊かさを示すオオムラサキが夏に樹液に現れることはありませんでした。個体の減少を裏付けるように越冬幼虫の頭数が減っています。

私たちの暮らしのさまざまな場面に深くかかわってきた生物多様性を保全するには何が必要とされているのでしょうか。



姿を消したハラビロトンボ